

ダニエルの書 - 第22番

預言的論争の解明：後の雨と最終危機の方法論

Jeff Pippenger

2023-12-17

神に認められた方法論は、イザヤ書28章と29章において具体的に示されており、そこでその方法論は「行に行を重ねて」として表現されている。2001年9月11日、ヨハネの黙示録18章の力ある御使いが降臨し、その際、彼は1840年8月11日に行った降臨を繰り返した。いずれの場合も、その降臨の後にバビロンが倒れたことが示され、なおその交わりのうちにいる者たちに出てくるようにとの呼びかけがなされ、そして間もなく再びなされるであろう。いずれの場合も、その予言を成就した出来事は世界的な影響を及ぼした。というのは、1840年には第一の天使のメッセージが「世界のあらゆる宣教拠点」に運ばれたのと同様に、2001年9月11日の出来事は全世界に衝撃を与え、人々はその出来事を理解したからである。1840年8月11日に成就した予言は、第二の災いに関わるイスラムに抑制が加えられることを示す予言であり、2001年9月11日の直後には、第三の災いに関わるイスラムに対して抑制が加えられた。

1840年8月11日は、1798年の終わりの時に封印が解かれたメッセージへの力の付与を表し、2001年9月11日は、1989年の終わりの時に封印が解かれたメッセージへの力の付与を表している。第一天使の運動の主要な原則は1840年8月11日に確認され、その原則は一日＝一年の原則であった。第三天使の運動の主要な原則は2001年9月11日に確認された。その原則とは、「行に行を重ねる」ことによって真理が確立され、終わりは初めによって示され、歴史は繰り返す、というものである。2001年9月11日の預言的出来事は、ホワイ姉妹の直接の言葉によって裏づけられるだけでなく、より重要には、その出来事がミラー派の歴史における同じ道標と完全に並行していたという事実によって確認される。1840年8月11日の出来事によって認識されたのは、予言の成就そのものというよりも、ミラーとその協力者たちが採用した方法論の健全性であった。

その出来事は予言を寸分違わず成就した。それが知られると、多くの人々が、ミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動は驚くべき弾みを得た。学識と地位のある人々が、説教においても彼の見解の出版においてもミラーと協力し、1840年から1844年にかけて、その働きは急速に広がった。『大いなる論争』, 335.

2001年9月11日、後の雨が測られ始めたとき、「論争」は真か偽かの方法論をめぐるものであり、今もなおそうである。ミラー派運動の予言は、1843年と1850年の両方の図表に示されており、ホワイ姉妹はそれらが主によって設計されたものであり、またハバクク書2章の成就であると認めている。ミラーとその協力者が採用した「予言解釈の原則」によって生み出され、その後「真夜中の叫び」のメッセージに力を与えた「驚くべき推進力」をもたらしたミラー派のメッセージは、その二つの聖なる図表に表されていた。これら二つの聖なる図表に表された予言は、ミラーの予言解釈の規則によって特定され、確立されたものであった。これらの図表は、ミラーの方法論によって確立された予言を、複

数の「表」に視覚的に表すようにというハバクク書の命令の成就であった。ハバクク書2章は、イザヤ書27章の「論争」を明らかにし、これと直接結びついている。

私は見張りの持ち場に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何と言われるか、また私が戒められるときに何と答えるかを見よう。ハバクク書 2:1

その聖句にある「reproved」という語は「議論を仕掛けられる」を意味する。第一の天使と第三の天使の運動の見張り人双方を代表するハバククは、議論を仕掛けられることになっており、論争が始まったとき自分が何と答えるべきかを理解したいと望んだ。第一の天使の歴史における答えは二つの聖なる図表の作成であり、第三の天使の運動の歴史における答えは『ハバククの二つの表』と題された預言的シリーズの作成であった。その図表とそのシリーズは、それぞれの歴史において示された方法論に基づいて構築された。ハバククにおいて、その方法論は見張り人がメッセージを確立するために用いるものを表し、同時に「議論される」争点をも特定するが、その争点が結果として二つの種類の礼拝者を生み出す。

私は見張り所に立ち、やぐらに身を置いて、彼が私に何を語られるか、また私が咎められるとき何と答えるべきかを見ようと見張る。主は私に答えて言われた。「幻を書き、これを板に明瞭に記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のため、終わりには必ず語り、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。」ハバクク書 2:1-4.

一方の者たちは信仰によって義とされ、もう一方の者たちは心のうちに高ぶっている。これはパリサイ人と取税人によって表されている。パリサイ人たちは慣習と伝統に基づく方法論を信頼しており、またパリサイ人は、神に選ばれた民であり真理の擁護者であると自称する者たちが支配する階層的な制度を敷いて群れを統制する宗教的システムをも体現していた。しかし彼らは結局、真理を十字架につけることに加担した。イザヤ書二十七章の預言的な「論争」は、聖書的な方法論の真偽をめぐるものである。その「論争」における対立者は、その時代のエリヤの方法論に従う者たちと、キリストの時代のサンヘドリンに象徴される、長年確立されてきた神学的専門家の制度である。

第二十七章は、「東風の日」に、彼が「stayeth」するとき、すなわち神が「彼の荒い風」を抑えるときに、「論争」が始まることを示している。「量をもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論じるだろう。彼は東風の日彼の荒い風をとどめる。ゆえに、このことによってヤコブの不義は清められる。」『purged』という語は、贖われることを意味し、調査の裁きにおける罪のぬぐい去りを表している。議論の対象となるその方法論は、神の民の罪がぬぐい去られるために通過しなければならない試験を表している。試験としてのエリヤの方法論はキリストの生涯において示されており、その時、キリストがエリヤと認めたバプテスマのヨハネのメッセージを退けた者は、イエスの教えから益を受けることはできなかった、と私たちはあらかじめ警告されている。

後の雨のメッセージは、イエスが御言葉であるゆえにその教えとして表されており、さらにそれ以上に、後の雨は「リフレッシュ」として、すなわち「主の臨在」と定義されるものとしても表されています。

だから、悔い改めて立ち返りなさい。主の御前から慰めの時が来るときに、あなたがたの罪がめぐり去られるように。そして、神は、前もってあなたがたに宣べ伝えられたイエス・キリストを遣わされる。使徒行伝 3:19、20

シスター・ホワイトは、1840年8月11日に黙示録第十章で降りてきた天使が「イエス・キリストにほかならないお方であった」と指摘している。したがって、2001年9月11日に降りてきた天使も「イエス・キリストにほかならないお方」であることになる。いずれの歴史における彼の降臨も、正しいか誤ったかという方法論をめぐる預言的な「論争」の始まりを示している。というのも、神の民が食べるよう命じられた彼の手の中の書物がそれを表しているからである。ガリラヤにいたとき、イエスは自分が天から下ってきたパンであると主張し、弟子たちに自分の肉を食べ、自分の血を飲まなければならないと教えた。彼はそのとき、公生涯のどの時点よりも多くの弟子を失い、去っていった者たちは二度と戻らなかった。彼らが去ったのは、彼の言葉を正しく霊的な意味で適用するのではなく、文字通りに受け取るという誤った方法論で彼の教えを分析することを選んだからである。イザヤ書二十七章の「論争」は、エリヤの使者によって表される方法論と対立する、確立された自称の聖書分析体系を表していることを立証するいくつかの証しを有する預言的な道標である。

それは、神の以前の契約と選ばれた民が漸進的に退けられていく過程における特定の一点を画し、同時に「かつては神の民でなかった者たち」との契約関係の始まりを画している。さらに重要なのは、その「論争」が、間もなく到来する日曜法で締めくくられる一時期の始まりを表しているという点である。アルファとオメガは常に、終わりを初めとともに示すので、そのことによって、この「論争」自体が、レビ記26章の祈りを成就するために認めて告白しなければならない、私たちの父祖の罪の一つの象徴となる。

ダニエル書第9章の祈りは、黙示録第11章の三日半の終わりにささげられるべき祈りを表している。その期間は、イザヤ書第27章では次のように描かれている。「城壁で守られた町は荒れ果て、住まいは見捨てられ、荒野のように残される。そこでは子牛が草を食み、伏して、その枝を食い尽くす。その枝が枯れると、折り取られる。女たちが来て、それに火をつける。彼らは悟りのない民だからである。それゆえ、彼らを造られた方は彼らをあわれまず、形づくられた方は彼らに好意を示されない。」

二人の証人には「恵みは示されない」というのも、彼らは偽りの予言を告げ、それによって三日半の「荒野」の期間の到来を招いたからである。彼らはそれ以前は「守りの堅い都」であったのに、その後「悟りのない民」となった。その都はやがて「荒れ果て」、「見捨てられた」「住まい」となった。それは、ソドムとエジプトの都の通りに横たわる、死んだ乾いた骨となった。やがて死者に起き上がるよう呼びかけがなされると、彼らは父祖たちの罪によって試されるが、そこには、第一のメッセージに力が与えられて始まり第三のメッセージの到来で終わる期間の初めにあった「論争」が含まれる。その論争とは、彼らの歴史におけるエリヤが示した方法論を受け入れるのか退けるのか、というものである。1863年、アドベンティズムの父祖たちは、エリヤによって提示されたモーセの「七つの時」のメッセージを退けた。

2023年7月から、イザヤ書二十七章の枯れた枝々は、自分たちがガリラヤの教会の罪、1863年の歴史、さらに2001年9月11日の歴史を繰り返すのかどうかを決断しなければならない。ハバクク第二章とイザヤ書二十七章、さらにエリヤ、バプテスマのヨハネ、ウィリアム・ミラーによって示される方法論を退けることは、地の終わりが到来した者たちのために記録された聖なる模範から益を受ける代わりに、私たちの父祖の罪を繰り返すことにほかならない。

これらのことは皆、彼らに起こったのは手本とするためであり、世の終わりが臨んでいる私たちへの戒めとして書き記されたのです。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。あなたがたに降りかかった誘惑は、人に共通なものほかありません。しかし神は真実なお方で、あなたがたが耐えられる力を超えて誘惑に遭うことをお許しにならず、むしろ誘惑とともに脱出の道も備えて、耐えられるようにしていただきます。だから、わたしの愛する者たちよ、偶像礼拝を避けなさい。賢い者に向かって語るつもりで言います。わたしの言うことを判断しなさい。コリントの信徒への手紙一 10:11-15。

聖なる方法論は、「真夜中の叫び」、すなわち後の雨のメッセージを確立する。そのメッセージを霊的に食するなら、ダニエルと三人の若者が野菜の食事によって見目もよく、肉付きも良くなったのと同じ確かさで、それに対応する体験を生み出す。しかし、ハバクク書2章では、信仰による義認の申し出を拒む者たちのつまずきは高慢であり、それが彼らが主を知ることへと進み行くのを妨げる。神の民が、真の方法論を受け入れ、御使いの手からのメッセージを食するという務めを先延ばしにできない時があるとすれば、それは今である。

私たちは後の雨を待ってはいはならない。それは、私たちに降り注ぐ恵みの露や雨を認め、受け入れるすべての者に臨む。私たちが光のかけらを集め、私たちが神に信頼することを喜ばれる神の確かなあわれみをありがたく受けとめるとき、あらゆる約束は成就する。「地が芽を出し、園がその中にまかれたものを芽生えさせるように、神である主はすべての国々の前に義と賛美を芽生えさせられる。」イザヤ書 61:11。全地は神の栄光で満たされる。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、984頁。

神の預言の言葉は、ニューヨーク市の巨大な建物が打ち倒されるとき、黙示録18章の天使が降りてきて、「黙示録18章1～3節が成就する」と示している。イザヤ書27章はその時を「東風の日」と特定しており、またそれは「荒い風」が抑えられる時でもある。「量をもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論じる。彼は東風の日にその荒い風をとどめる。」ホワイト夫人もまさに同じ時を指し示している。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが注ぎ出される時期に堅く立てよう聖徒たちを備える。『初期の著作』 85。

諸国を怒らせる力は、後の雨が降り始めたときに到来した。だがその力が諸国を怒らせるやいなや、それは押しとどめられた。というのも、イザヤは「彼はその荒い風をとどめる

」と記しているからである。荒い風、すなわち東風は、後の雨が注がれ始め、救いの働きが終結に向かうときに、抑えられる。救いの働きの終結は封印の時である。「行に行を重ねて」言えば、十四万四千人の封印の間に抑えられているその荒い、すなわち東の風は、黙示録第七章の四つの風である。

この後、わたしは四人の御使いが地の四隅に立ち、地の四つの風を押さえて、風が地にも海にも、またどの木にも吹きつけないようにしているのを見た。さらに、日の出る方から上って来る別の御使いを見た。彼は生ける神の印を持っており、大声で、地と海に害を加える権威を与えられている四人の御使いに叫んで言った。「わたしたちが、わたしたちの神のしもべたちの額に印を押し終えるまで、地にも海にも木々にも害を加えてはならない。」ヨハネの黙示録 7:1-3

十四万四千の封印は、キリストのエルサレムへの凱旋入城によって予表された。そこでキリストは、生涯でただ一度、ろば（イスラムの象徴）に乗り、ラザロがエルサレムへの行列を先導した。ホワイト姉妹は、その歴史においてラザロを封印の象徴であると述べている。

ラザロのもとへ来るのを遅らせられたのは、キリストが、ご自分を受け入れなかった人々に対して憐れみのご計画をお持ちだったからである。彼はなおしばらくとどまられた。それは、ラザロを死からよみがえらせることによって、頑なで不信の民に対し、ご自分がまことに「よみがえりであり、いのちである」ことのもう一つの証拠をお与えになるためであった。彼は、この民、すなわちイスラエルの家の貧しくさまよう羊に対する望みをすべて捨てることに、どうしても気が進まなかった。彼らが悔い改めないことのゆえに、彼の心は張り裂ける思いであった。その憐れみにおいて、彼は、ご自分こそが回復者、すなわちただお一人でいのちと不死を明るみにもたらし得る方であることを示す、もう一つの証拠を彼らに与えようと定められた。これは、祭司たちが曲解することのできない証拠となるはずであった。彼がベタニヤへ行くのを遅らせられたのは、このためであった。この頂点となる奇跡、すなわちラザロの復活は、彼の業とご自分の神性の主張に、神の印を押すことになるはずであった。『The Desire of Ages』 528、529ページ。

2020年7月18日に始まった遅れの時期は、キリストがラザロを復活させるに先立ち、あえて時を遅らせたことによって表されている。黙示録11章の遅れの時期は、三日半の終わりに終結する。その間、二人の証人は通りに死体のまま横たわっていた。そして、ラザロが遅れの時期の後に復活させられたように、黙示録の二人の証人も同様に復活させられる。彼らが復活すると、エルサレムへの行列を先導し、「神の印」と、キリストの神性を証しする「冠となる奇跡」を表す。この復活は、十四万四千人への封印の完了を示す。その封印は、2001年9月11日に到来した四つの風、東風、荒風が抑えられている間に行われる。

日曜法という時に、それらの風は解き放たれて、黙示録13章の地から上ってくる獣に報復の裁きをもたらす。今やその風は、封印の期間にそれらを抑えている四人の天使の指の間からさえ、すでにすり抜けつつある。東風の日に関する預言の霊の最も深遠な言及の一つは、『証言』第九巻に見いだされる。その巻では、十一ページから靈感を受けた言葉が始まっており、したがって象徴的に「9・11」から始まっている。その章の題は「最後の

危機」だが、同時に「王の来臨のために」と題された部の第一章でもある。

その巻を編纂した編集者たちが、章の節と表題を意図的に改変した証拠はない。しかし王の来臨は、花婿の来臨として容易に認識される。十人のおとめのたとえでは、彼女たちの器に油があるか否かによっておとめたちに生じる真夜中の危機とともに、それは起こる。いま到来しつつある真夜中の危機は、表題が示すとおり、十人のおとめにとっての最後の危機である。その危機において、彼女たちが油を持っているのか、持っていないのかが明らかになる。油は単に聖霊というだけではない。それは聖霊であると同時に、正しいメッセージであり、正しい品性でもあると明確に定義されている。

正しい方法論は「真夜半の叫び」の正しいメッセージを確立し、そのメッセージが受け入れられて実行に移されると、正しい品性を生み出す。その品性こそが、最後の危機において神の封印を受ける品性である。神の民を封印する過程は、東風の日の到来とともに、2001年9月11日に始まった。その時のメッセージは、食べることが求められた。食べるか食べないかは、イザヤの「論争」によって示され、また、論争の中で見張り人たちが何と答えるべきかというハバククの問題によっても示されている。マタイ25章とハバククにおける「遅れる時」は、二つの階級の礼拝者の象徴によって結末を迎える。黙示録11章で三日半に象徴されている「遅れる時」は、ほとんど終わろうとしている。

その「遅延の時」は、第九巻のその章の冒頭でも、パウロがハバクク書二章四節を言い換えているヘブル人への手紙の一節とともに示されている。パウロのこの言及は、ハバクク書二章を第三天使の運動の中に位置づけている。というのも、その歴史においてキリストは至聖所に入られ、その歴史において主の大祭司としての奉仕の光が明らかにされ、そして神の御言葉におけるキリストの大祭司職についての最も明瞭な啓示が示されているのは、パウロによるヘブル人への手紙だからである。

第一の天使の運動におけるハバクク書2章の理解は、キリストが至聖所へ移られることをまだ認識していなかった。というのも、それは真夜中の叫びの宣布の終わりまで起こらなかったからである。パウロが言及する遅延の時期は、ハバクク書およびマタイに見られるそれと同じであるが、それは2020年7月18日に始まるものである。ハバクク書2章の最後の節は、ミラー派の歴史における真夜中の叫びの結びと、第三の天使の到来を表している

:

しかし、主はその聖なる宮におられる。全地よ、その御前に沈黙せよ。ハバクク書
2章20節。

『Testimonies』第9巻は、11ページ(9-11)から、十人の乙女のたとえ、遅延の時期とハバクク書およびマタイによる福音書との関連、そして最後の危機と、預言論争が起こった2001年9月11日を強調している。

第1節 王の到来のために

「もうしばらくすれば、来るべき方が来られ、遅れることはない。」ヘブル人への手紙 10:37

最後の危機

私たちは終わりの時に生きています。急速に成就しつつある時のしるしは、キリストの再臨が間近に迫っていることを告げています。私たちが生きているこの日々は、厳粛にして重大です。神の御霊は徐々に、しかし確実に地上から退きつつあります。神の恵みを軽んじる者たちには、すでに災いと裁きが下っています。陸と海における災害、社会の不安定、戦争の警鐘は、どれも不吉な前兆です。それらは、きわめて重大な出来事が近づいていることを予告しています。

悪勢力は力を結集し、結束を固めつつある。彼らは最後の危機に備えて力を強めている。まもなく私たちの世界には大きな変化が起こり、最後の動きは迅速に進むだろう。

世界の情勢は、苦難の時代がまさに私たちの目前に迫っていることを示している。日々の新聞には、近い将来の恐るべき紛争の兆候が満ちている。大胆な強盗が頻発し、ストライキは日常茶飯事である。窃盗や殺人は至るところで行われている。悪霊に取り憑かれた者たちが、男も女も幼い子どもたちの命までも奪っている。人々は悪徳に耽溺し、あらゆる種類の悪がはびこっている。

敵は正義をねじ曲げ、人々の心を私利私欲で満たすことに成功した。

「『正義は遠くに立ち、真理は通りに倒れ、公正は入ることができない。』イザヤ書59章14節。大都市には、貧困と悲惨のうちに暮らし、食べ物も住まいも衣服もほとんど欠いている人々が大勢いる。一方、同じ都市には、心の望む以上のものを持ち、贅沢に暮らし、豪華な調度を備えた家や身の飾りに金を費やし、さらにはもっと悪いことに、酒やたばこ、そして脳の働きを損ない心の均衡を崩し魂を墮落させるその他のものといった官能的欲求の満足に費やしている者たちもいる。飢えに苦しむ人々の叫びは神の前に届いているが、その一方で、あらゆる種類の圧迫と搾取によって、人々は巨万の富を築き上げている。」

あるときニューヨーク市にいた私は、夜のさなか、天に向かって階を重ねてそびえ立つ建物を見るよう促された。これらの建物は耐火であると保証され、所有者や建設者の栄光を示すために建てられていた。さらに高く、なお高くこれらの建物はそびえ、その建造には最も高価な材料が用いられていた。これらの建物の持ち主たちは、「どのようにすれば最もよく神の栄光を現せるのか」と自問してはいなかった。主は彼らの思いの中にはなかった。

私は思った。「ああ、このように自分の財を投じている人々が、神がご覧になるように自分たちの歩みを見ることができたなら！ 彼らは壮麗な建造物を次々と築いているが、宇宙の支配者の御目には、彼らの計画や企てがなんと愚かなことか。彼らは、心と思いのすべての力を尽くして、いかにして神の栄光を現すかを求めてはいない。これこそ人間の第一の務めであるのに、それを見失っているのだ。」

これらのそびえ立つ建物が建てられていくにつれ、所有者たちは、自己の欲を満たし隣人の羨望をかき立てるために使える金を持っていることに、野心に満ちた誇りで喜び勇んだ。彼らがそのように投じた金の多くは、強圧的な取り立てや、貧しい者を虐げて搾り取ることによって得られたものだった。天では、あらゆる商取引が記録されていることを彼らは忘れていた。不当な取引も、あらゆる詐欺行為も、そこに記されている。やがて、人々はその詐欺と傲慢のうちに、主がこれ以上は越えることを許さ

れない一線に達し、ヤハウエの忍耐には限度があることを知るだろう。

次に私の前をよぎった光景は火災の警報だった。男たちは、高くそびえ、耐火性だとされる建物を見て言った。「それらは完全に安全だ。」しかし、これらの建物は、まるでタールでできているかのように焼き尽くされた。消防車は破壊を食い止めるために何もできなかった。消防士たちは消防車を操作することができなかった。『証言』第9巻、11-13。

「方法論」をめぐって起きた「論争」は、ダニエル書第1章で表されている時期の初めに、またダニエル書第1～3章で表されている時期にも、さらに1840年8月11日に始まる歴史でも、またガリラヤの危機におけるヨハネによる福音書第6章の歴史でも、そして2001年9月11日（から2020年7月18日まで）の歴史でも表されているが、今やそれは、アドベンチズム全体の内部ではなく、荒野で叫ぶ「声」によって惰眠から揺り起こされつつある死んで乾ききった骨の間で、繰り返されている。

次の記事では、イザヤ書28章と29章に示されている「後の雨」としての方法論について考察します。

また、私は主の声を聞いた。「誰を遣わそうか。誰がわれわれのために行くだろうか」と。私は言った。「ここにおります。私をお遣わしてください」。すると主は言われた。「行って、この民に言え。『聞けども悟らず、見れどもわからない』と。この民の心を鈍らせ、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、立ち返って癒されることのないように」。私は言った。「主よ、いつまでですか」。主は答えられた。「町々が住む者もなく荒れ果て、家々に人がいなくなり、地がことごとく荒れすたれるまで。また、主が人々を遠くへ移し、この地のただ中が大いに見捨てられるまで」。しかしなお、その中に十分の一があり、それは帰って来て、また食い尽くされる。葉を落とすときにもその切り株が残るテリビントや樅の木のように、聖なる種がその切り株となる。イザヤ書 6:8-13